

現代家族と子供の社会化

野々山久也

1. はじめに

産業化の進展とともに、親族体系という文脈において核家族は、構造的に自立化してきた。¹⁾わが国の社会学者たちは、この現象をとくに「核家族化」と呼び、このことばを一般的な日常用語にまで押しひろめた。しかしながら、この核家族化についての社会学的分析についていえば、家族構成や家族形態という家族の外的側面での変化の分析はある程度すすめられてきているにしても、この現象の家族内の人間関係にたいする意味の分析、およびこのためにわれわれは何を準備し、また何を覚悟しなければならないかという、より深層面（相互作用の側面）での変化の分析は、いまだの感がある。

そこで、ここでは社会体系におけるパターン維持 (pattern maintenance) と緊張処理 (tension management) の機能的な下位体系としての明確な一単位となってきた核家族の基本的機能に準拠しつつ、²⁾ そのより深層面での変化を量的ならびに質的側面から分析してみることにしてみたい。そして、その分析された諸項目から構造的に自立的な核家族にとって不可欠な発達の・

1) パーソンズの用語では、これは核家族の自立化ではなく、核家族の孤立化 (isolation of nuclear family) ということになる。T. Parsons, "The American Family," Parsons & Bales (eds), *Family, Socialization and Interaction Process*, Routledge & K. P., 1956, p. 10.

2) T. Parsons, R. F. Bales, & E. A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, The Free Press, 1953.

機能的要件としての核家族内の役割分化の一定のパターンを予想してみたい。さらに、このパターンの形成に失敗したことが一つの基本的原因と考えられる家族病理の一つである精神分裂病者の家族の臨床例を提示し、この予想されたパターンの妥当性に関する実証的検討を行なってみたい。

2. 家族の構造的・機能的変化

現代家族に関する変動論の多くにおいて、変動の主体としての家族についての概念的明確化の欠如が指摘されるとして、ベルとヴォーゲルは次のようにいっている。³⁾ すなわち、「機能を喪失したのは核家族なのか、それとも拡大家族なのか、明確な区分がなされていない」と。同じことは、現代における家族変動の主たる傾向としてパーソンズが強調する核家族の構造的孤立化論とその反論についても指摘できる。⁴⁾ パーソンズの指摘する構造的孤立化の主体は、家族ではなく明確に規定された核家族であり、またその孤立化とは、親族体系や社会体系からの孤立化ではなく、あくまでも親族体系という文脈のなかでのことであり、また親族接触をしないという意味での機能的な孤立化ではなく、生殖家族 (family of procreation) が定位家族 (family of orientation) から構造的側面、すなわち主として住居形態と収入獲得および消費生活という側面において孤立化することを意味している。よって、パーソンズのいう核家族の孤立化とは、わが国の社会学者が用いている核家族化という親族体系の構造上の変化を意味するのか、単なる世帯構成上の変化を意味するのか、それともまた機能上の変化を意味するのか、はっきりしない曖昧な概念とは異なって、明らかに親族体系という文脈における家族の構造的側面での変化を意味するものである。ただ用語上の問題としてパーソンズ

3) N. Bell & E. Vogel, *A Modern Introduction to the Family*, The Free Press, 1960, P. 6.

4) 核家族孤立化論とその反論については、次を参照されたい。山根・野々山「日本における核家族の孤立化と親族組織」『社会学評論』第18巻第1号, 1967, PP. 64—84.

の用いる孤立化 (isolation) という用語は、誤解をまねきやすいだろう。そこで本稿では、それを「自立化」と呼び改めることにしたい。

親族体系における家族の構造的変化としての核家族の構造的自立化の意味をここで整理して考察してみると、次のようになるだろう。すなわち、核家族の構造的自立化とは、夫婦家族 (conjugal family) としての核家族が親族体系における明確な顕在的単位となること (従来は直系家族が支配的単位であって、核家族はその潜在的な下位体系であった)、および核家族が社会体系の機能的な下位体系としての明確な一単位となること (従来は拡大家族がその支配的単位であった) の二つを意味する。⁵⁾ 前者は、核家族が親族体系における現実的な親族接触の単位、すなわち主位境界 (main boundary) となることであり、後者は、夫婦家族としての核家族が一つの生活の単位 (a unit of living) となることである。⁶⁾

家族の機能的側面での変化については、すでにいくつかの指摘が見いだされる。家族の機能は家族外に移行し、家族はその機能を喪失してきているとみるオグバーンの家族機能喪失論や、家族はそれ自体のもつ情愛の授受や人格形成というような本質的機能をますます集中化し、その機能を専門的に遂行するようになってきているとみるバージェスの家族機能特殊化論などがそれである。⁷⁾ 家族の機能の変化を論じる場合、ベルとヴォーゲルの指摘するように構造的側面での変化を無視して論じることはできない。オグバーンの指摘とバージェスの指摘における差異は、それぞれ家族の構造的側面での変化についての十分な配慮に欠けるために生じたものであって、両者の指摘は

5) したがって、単なる核家族的世帯化や核家族世帯の比率の増大だけでは「核家族の構造的自立化」を意味するものではない。

6) 主位境界に関しては次を参照されたい。山根・野々山, 前掲論文, 1967, P. 67.

7) W. F. Ogburn, "The Changing Functions of the Family", in *Journal of Home Economics*, 25, 1933, pp. 660—664.

E. W. Burgess, "The Family in a Changing Society", in *American Journal of Sociology*, 53, 1948, pp. 417—421.

実は同じことを異なった視点から指摘したにすぎない。従来、主位境界であり、また生活の単位であった拡大家族としての直系家族は、すでに述べたように核家族の構造的自立化にともなって主位境界ならびに生活の単位をそれぞれ自立的核家族に委譲してきている。オグバーンの指摘する機能喪失の主体は、主として核家族が構造的に自立化する以前の家族を意味しているだろう。一方、バージェスの指摘する機能特殊化の主体は、主として核家族が構造的に自立化してきたからの家族を意味しているだろう。

家族の機能的変化に関する分析において、さらに以上のものとは異なった意味での機能喪失論ないしは機能特殊化論が存在する。それは社会体系の構造・機能的分化にともなって、家族が社会体系の機能的下位体系としての明確な一単位として分化してきたこと、そのことに関係している。すなわち、主位境界として、また生活の単位として一つの構造・機能的境界をもつ家族がどの次元の機能を家族外に移行し、またどの次元の機能を特殊化してきたかということである。パーソンズにしたがって、一般的に社会的システムの機能的要件を適応、目標達成、統合、および潜在性（パターン維持と緊張処理）とすれば、一つの社会的システムとしての家族についても同じこれらの四つの機能的要件を指摘することができるだろう。そして一つの社会的システムとしての家族は、これらの四つの機能的要件のそれぞれに対応して四つの機能的下位体系に内部的に分化しなければならないだろう。核家族の構造的自立化にともなって家族が主として喪失してきた機能は、これらの四つの機能的次元のうちの対外的・手段的次元の機能、すなわち適応の機能である。そして家族が主として特殊化してきた機能は、対内的・表出的次元の機能、すなわち社会体系における潜在性の機能である。

このような意味での家族の機能的変化については、反面で外的な社会体系にたいする家族の機能的依存性の増大を指摘することができるかもしれない。しかしながら、機能的依存性の増大という現象は、家族について指摘される

だけでなく、家族と社会との双方に指摘されるといえるだろう。このような場合、依存性 (dependence) を強調するよりも、むしろ家族と社会との機能的な相互補足性 (complementarity) の増大を強調すべきだろう。このような意味からして、本稿では家族の機能的依存性の増大ということばを用いないことにする。

家族の機能的変化について、ここで整理して考察してみると、次のようになるだろう。すなわち、かつて主位境界であり、また生活の単位であった直系拡大家族は、核家族の構造的自立化にともなって、その主位境界としての機能的境界を自立的核家族に委譲し、社会体系の構造・機能的分化にともなっていくつかの対社会的な適応的機能を家族外に移行し、その機能を喪失ないし縮小してきている。また自立的核家族は、社会体系の機能的下位体系としての明確な一単位となることによって、その機能をますます専門化し、特殊化してきている。そして、この特殊化し、専門化してきている機能とは、社会体系の機能的要件の一つであるパターン維持および緊張処理の機能である。よって、現代における家族は、社会体系の一機能的下位体系としてのパターン維持および緊張処理の機能を専門的に担当する機能集団として機能的に特殊化 (機能的分化) してきているといえることができる。

現代家族変動について、ここで構造的変化と機能的変化をあらためて一つの文章に簡約してみると、次のようになるだろう。すなわち、現代における家族変動に関して、親族体系という文脈においては核家族の構造的自立化を、そして社会体系という文脈においては家族の機能的特殊化を、それぞれ指摘することができる、と。

さて、核家族の構造的自立化と家族の機能的特殊化は、核家族が一つの生活の単位となること、すなわち消費的経済単位、意志決定単位、情緒的結合単位、ならびに社会化単位となることを意味している。しかしこの場合、家族が機能的に特殊化してきていること、すなわち家族が社会体系の機能的下

位体系としての明確な一単位となってきたことから、次のことに注意する必要があるだろう。すなわち、核家族が消費的経済単位であり、かつ意志決定単位であることは、あくまでもより上位の情緒的結合単位としての、さらにまた社会化単位としての二つの機能を達成するという範囲内においてのみ考えられることであるということである。かかる意味において現代家族の基本的機能は、パターン維持と緊張処理であるということができよう。パーソンズがそれを子供の社会化 (socialization of child) と成人のパーソナリティの安定化 (stabilization of adult personality) としていることは、周知のとおりである。⁸⁾

さて次に、核家族の構造的自立化にともなって、上述の家族の二つの基本的機能がどのように変化してきたかを、それぞれ量的ならびに質的側面に区分して考察してみることにしたい。

3. 基本的機能の量的・質的变化

核家族の構造的自立化は、単に家族構成や家族形態という家族の外的・制度的側面における変化を意味するだけではない。それは集団としての家族の内的な相互作用の側面における変化をも伴っている。この点に関する周到な分析は、われわれに核家族の構造的自立化の実践的意味とそれに対応する日常的な心構えを示唆してくれるだろう。そして、それは核家族化ということばを一般的な日常用語にまで流布せしめた社会学者の焦眉の急であるともいわなければならないだろう。残念ながら、本稿においてその周到な体系的分析を提示するというわけにはいかない。だがしかし、ここではその基本的部分のいくらかでも述べてみることにしたい。

図1のごとく、核家族の構造的自立化にともなって家族の二つの基本的機能、すなわち成人のパーソナリティの情緒的安定化と子供の基礎的社会化は、

8) T. Parsons, *op. cit.* 1956, pp. 16—17.

それぞれ量的ならびに質的に変化してきている。

まず、成人のパーソナリティの情緒的安定化の機能の量的変化としては、家族の構造・機能的変化につれて夫婦結合の重要性が増大してきたこと、す

図1 基本的機能の量的・質的变化

| | | | |
|----------------------------|------|---------------|------------|
| 情 安 緒 定 的 化 | 量的変化 | 夫婦結合の重要性の増大 | 核家族境界の顕在化 |
| | 質的变化 | 夫婦結合の基盤の変化 | 制度から人格へ |
| 基 社 会 的 化 | 量的変化 | 社会化の責任所在の明確化 | 夫婦への排他的集中 |
| | 質的变化 | 子供の独立性の重要性の増大 | 親への従順から独立へ |

なわち親族体系という文脈において核家族の境界が主位境界として顕在化してきたことが指摘される。従来は、夫婦結合よりも親子結合や直系家族全体の結合の方が量的により重要視されていたといえるだろう。たとえば、「家」を守るという理由によって離婚が法的に正当化されていたのである。そして次に、その質的な変化としては夫婦結合の基盤が制度そのものから夫婦のそれぞれのパーソナリティに依存するようになってきたことである。⁹⁾ たとえば、最近の離婚理由の最も多くが性格の不一致であるということは、このことを物語っているものといえるだろう。

一方、子供の社会化の機能の量的変化としては、社会化の責任の所在が明確になってきたこと、すなわち子供の社会化の責任がその子供の両親である夫婦に排他的に集中するようになってきたことが指摘されるだろう。従来では、夫婦だけでなくその家族を代表する家父長や主婦など、家族全員にこうした責任が量的に分散していたのである。そして次に、その質的变化としては、期待される社会化の内容として、子供の独立性をより重要視するようになってきたことが指摘されるだろう。すなわち、親にたいして従順で素直な

9) このことはバージェスらのいう「制度から友愛へ」ということと一致している。E. W. Burgess & H. J. Locke, *The Family from Institution to Companionship*, American Book Co., 1945.

子供から、親から独立する子供へという社会化における質的变化がみられるのである。

以上のように四つに分類された量的ならびに質的变化を役割構造という観点に立って、さらに検討を加えてみると、次のようなことがいえるだろう。すなわち、まず夫婦結合の重要性の増大とは、夫婦がおのおのの定位家族の役割構造から情緒的に独立している必要性が増大してきたことを意味する。そして、夫婦結合の基盤の変化とは、かつて家父長制という点で制度的に画一的であった家族の役割構造、ことに結婚することによって形成される生殖家族の役割構造の顕現 (manifestation) に、多様性の生じる可能性が増大することを意味する。子供の社会化の責任所在の明確化については、次のような意味を理解することができるだろう。すなわち、それは夫婦が子供の社会化という課題を達成するためにその責任を共有し、互いに相手の役割を支援しあうことの必要性、すなわち相互に役割洞察力 (role insight) を高める必要性が増大してきたことを意味する。最後に、社会化において期待される子供の独立性の重要性の増大は、社会化するにつれて家族から子供が独立していくことを可能にする発達の・機能的要件としての家族内役割分化の必要性がより増大してきたことを意味する。そして、この役割分化のあり方には一定のパターンの存在が予想されるといえるだろう。

はじめに述べたように、本稿の目的は、この核家族内の役割分化のあり方の一定のパターンを予想することである。そこで、次に核家族の役割構造のなかで子供が独立していくという側面をとりわけ中心にして分析した子供の社会化過程の図式を提示し、それを検討しながら、核家族内の役割分化のあり方の一定のパターンを予想してみることにはしたい。

4. 社会化過程と家族内役割分化

まず子供の社会化過程を、図2をもとにしながら概略的に説明してみたい。

図2 社会化の各段階と夫婦境界

| 時 期 | 離乳依存関係 | 危 機 と 位 相 | 夫 婦 境 界 |
|---------------------|-------------------------|----------------------------|-----------|
| 第1期 0才 } 1.5才 | 器質的離乳 口唇依存 | —口唇危機— 口唇依存期 —肛門危機— | 形式的—実質的 |
| 第2期 1.5才 } 3才 | 口唇離乳 愛情依存 | 愛情依存期 —エディプス危機— | 第二次的—第一次的 |
| 第3期 3才 } 11才 | 愛情離乳 権威依存 | 権威依存期 (潜在期) —性器危機— | 適応的—統合的 |
| 第4期 12才 } 17才 | 権威離乳 愛情選択 権威選択 | 思 春 期 (選択期) —家族離乳危機— | 態度的—行動的 |
| 第5期 18才 } | 家族離乳 配偶者選択 内的権威確立 | 青 年 期 (独立期) | 核家族の自立化 |

社会的、心理的、ならびに身体的に成人になるまでの過程を五段階に区分し、第一期から乳児期、幼児期、児童期、少年期、青年期と名づけることは別に目新しいことではない。ここでは一応、この五段階の位相を口唇依存期、愛情依存期、権威依存期(潜在期)、思春期(選択期)、青年期(独立期)と呼ぶことにしたい。この五段階に配分される年齢は、おおむね図2に示したとおりである。子供は、この区分にしたがって最終的に家族から情緒的に独立し、配偶者選択の過程(mate-choice process)につづく結婚によって生殖家族の形成(核家族の構造的自立化)を達成していくことになる。定位家族からのこのような情緒的独立をいま家族離乳(family-weaning)と呼ぶとすれば、子供の社会化の過程とは、この家族離乳を達成するためのものであるということができよう。そして当然のことながら、家族離乳を達成するた

めには、それ以前に家族依存 (family-dependency) を確立していなければならない。子供の社会化過程における家族依存とは、子供が定位家族において「子供である」という役割同一性 (role identity) を獲得することを意味している。一般的にいて、社会的に独立しているすべての成人は、かつて定位家族において「子供である」という役割同一性を獲得し、それを基礎にしてのみ社会的に独立した成人になってきたといえることができる。その意味で、家族はいまだ社会化されていない子供に「子供である」という役割同一性を、まず最初に獲得させる最も重要な社会的機関であるといえるだろう。

子供の社会化の過程は、したがって家族依存の確立であると同時に家族離乳の達成であるということになる。このことはわれわれに次のようなことを示唆している。すなわち、家族依存および家族離乳は包括的な概念であって、子供の社会化の実際の過程には、さらにいくつかの依存および離乳が存在するのではないだろうかということ、そして子供がそれらのいくつかの依存および離乳を確立達成していくためにはそれぞれの時期に適合した核家族内役割分化または役割構造の形成がみられるのではないか、ということである。

予想されるそのいくつかの依存および離乳は、図2の離乳依存関係の欄に示されている。そして核家族内の役割分化については、主として父親 (夫) および母親 (妻) に関する核家族内役割分化のモデルとして図2の境界形成の欄に示されている。依存が確立され、つづいてその依存から離乳が達成され、また新しい段階での依存がはじまるという位相は、一段階ずつの着実な弁証法的発展である。そして新しい段階に止揚されるとき、社会化の過程は一定の危機 (crisis) をはらんでいる。この危機は、病理発生的家族でないかぎり、核家族内役割分化の安定した形成によって難なく解決されていくのが普通である。フロイトの精神分析理論ならびにパーソンズの社会化理論にしたがって、ここでもその危機を口唇危機、肛門危機、エディプス危機と呼ぶことにしておく。そして、このあとにつづく二つの危機は、女子の初潮な

どに象徴される性器危機 (genital crisis) と、子供が家族から情緒的に独立するさいの家族離乳危機 (family-weaning crisis) である。¹⁰⁾ 以下、各段階を図2にしたがって説明してみたい。

第一期 (口唇依存期)

第一期は、子供の誕生とそれにつづく口唇依存 (oral-dependency)、すなわち子供 (胎児) が母体から器質的に離乳 (organic-weaning) し、口唇をとおして吸うことによって生命を維持し、またその口唇によって現実吟味 (reality testing) を行なっていく時期である。核家族内境界形成の面では、妻は子供を産み、母親の位置を占める。母親は、心理性的 (psycho-sexual) な理由から子供と母子一体性 (mother-child identity) を確立する。母親は子供のナーチュランス (nurturance) の役割遂行において全面的に優位な位置を占めている。¹¹⁾ この段階での夫は、子供にたいして形式的には父親としての位置を占めても、母親のように全面的、直接的、実質的役割を果たすことはむずかしい。そこでの父親の役割は、母子の保護と安全性の確保のための手段の準備、および生まれた子供を法的ならびに社会的に嫡出することによって子供を社会体系ならびに親族体系に位置づけることである。それは主として家族の対外的 (external) および道具的 (instrumental) な役割を意味しているだろう。しかし、ここでは家族にたいするというよりもむしろ子供にたいする役割を問題にしているのであるからして、この段階での父母間の質的役割分化、すなわち夫婦境界は、道具的—表出的 (instrumental-expressive) というよりも、むしろ形式的—実質的 (formal-substantial) という区分が可

10) S. フロイトは、エディプス危機に対応してエディプス・コンプレックスを論じているが、本稿では家族離乳危機に対応して「ファミリー・コンプレックス」を主として論じていることになる。

11) パーソンズの指摘するように「子供は家族に生まれるのではなく、母親の手に生まれる」のである。T. Parsons, "Superego and the Theory of Social Systems, in Parsons, Bales, & Shils, *op. cit.*, 1953, pp. 13—28.

能だろう。

第二期（愛情依存期）

次の第二期では、母親と子供は、その相互の心理的な結合から無限定的（diffuse）で強いエロチックな愛情の結合を確立する。すなわち、乳歯の生えだしてきた子供は、口唇依存から口唇離乳（oral-weaning）を達成し、母親を部分的対象としてでなく統一された一個の対象として知覚するようになる。そうして知覚された母親にたいして、子供は無限定的な愛情依存（love-dependency）を確立していく。この時期も子供のナーチュランスの役割遂行においては、依然として母親の方が全面的に優位な位置にある。父子間の相互作用も成立しはじめるが、母親のような直接的役割を果たすことはむしろかしく、間接的であり、補助的である。この時期には、子供は父親からも愛されていることを知り、父親をも愛するようになるが、この時期の終るころは別として、核家族内において父親が母親に完全にとって代ることはむしろかしく、子供にとって父親は母親の補助者または母子関係にとって特殊な一部外者と見なされている。つまり子供は、父親を母親とは異なった重要な役割相手（role partner）とは認識していないのである。このような意味からして、この段階での父母間の役割分化は、第二次的—第一次的（secondary—primary）という区分が可能だろう。

第二期の初めに口唇離乳するとともに、親、ことに母親にたいして無限定的で強いエロチックな愛情依存の体系を確立してきた子供は、母親を愛するといういくらか非現実的な傾向をともなった行動をするようになる。たとえば、母親を人形や動物と区別せずに同じ感情で愛するようになる。周知のようにパーソンズによるこの時期の子供の分析は、次のようである。すなわちこの段階の子供は、自分を愛してくれる母親にカセクト（cathect）し、母親を内面化することによって自律性（autonomy）と依存性（dependency）の要求性向（need-dispositions）をもつようになる、と。この時期の子供は、

母親の態度いかんで母親と情緒的に共棲的關係 (symbiotic relationship) をますます強化させることになるか、あるいは母親から心理的に拒否されて自閉的 (autistic) になるかだろう。

第三期 (権威依存期)

第三期は、子供が親、とりわけ母親と同じ世代ではなく、母親は成人であり、自分は「子供である」という役割同一性を確立する重要な時期である。このことは、一方では母親とのいままでの無限定的でエロチックな結合の発展的解消、すなわち愛情離乳 (love-weaning) を、そしてもう一方では親の権威、とりわけ父親の権威への依存ということの意味している。¹²⁾ 愛情離乳と親への権威依存 (authority-dependency) は、母子間の無限定的でエロチックな結合を発展的に解消させるための夫婦の連合 (marital coalition) と父母間の役割分化を前提にしており、¹³⁾ また勢力 (power) の有無による世代境界 (generation boundary) の存在を前提にしている。そして、さらに第三期の終りから第四期の初めにかけて達成されなければならない個別的権威 (particularistic authority) からの離乳を達成するためにも、この段階において子供は親の権威を認め、それに依存することが前提となる。もしこの時期の危機を解決できなければ、子供は子供としての役割同一性の確立ができずに核家族内で安定した位置を占めることのないままに放置されることになる。それは現実として家族外に放置されたり、遺棄されたりするわけではなく、核家族内において子供としての所定の位置を占めずにアウトサイダー的存在となるのである。ときに、それは近親相姦的 (incestuous) な関係を形成することにもなるだろう。なぜなら、核家族内において子供としての役割を取得することは、

12) ここでの親の権威あるいは父親の権威とは、いわゆる「権威主義的」な意味での権威ではない。子供を社会化させるという目的におけるリーダーあるいは教育者としてのそれである。

13) ここでいう夫婦の連合とは、夫婦の愛情ある結合のことであり、また夫婦が父母として相互の役割を洞察することであり、ときに夫婦同一性 (marital identity) と呼ばれるものである。

まさに近親相姦を回避するための最善の手段であるからである。したがって、いまもしこの近親相姦的な関係を現に有する家族が存在するとすれば、それは家族内での世代の軸による役割分化、すなわち世代境界の存しない家族ということになるだろう。

第三期は、子供による親の権威、とりわけ父親の権威への依存であるが、それはそれまで間接的、補助的な役割を果たしていた父親が家族内での父親としての、母親とは異なった明確な役割を果たしているということをお子供が学習することである。家族内で父親が力強く重要な役割を遂行しているとき、子供はその権威に同一化 (identification) し、依存することになる。このような父親は、主として母子の生活の安定ならびに自己の家族を外的体系に適応させるための核家族内における重要な役割を遂行しており、一方、母親は、子供がスムーズに父親の権威に依存し、家族が情緒的に統合するように子供と父親 (夫) とのあいだを調整する役割を主として遂行する。その意味において父母間の質的役割分化は、適応的一統合的 (adaptive-integrative)、またはパーソンズの社会化理論における用語を借用すれば、道具的一表出的という区分が可能であるといえるだろう。

この時期において子供にとってさらに重要なことは、子供が父母のどちらかと性的に同一化することによって性的役割同一性 (sexual role identity) を確立しはじめることである。男の子の場合には、第一次的同一化の対象としての母親の無限定的な愛情から離乳しつつ、権威の主たる対象としての父親に第二次的同一化をし、そのまま性的役割の対象として父親に同一化していく。しかし女の子の場合には、第一次的同一化の対象としての母親から愛情離乳しつつ、権威の主たる対象としての父親に第二次的同一化をしようとするが、家族内でとりわけ父親によって性的同一化の対象を拒否されることによって、かの女は母親を性的同一化の対象として選択することになる。もちろん、この選択の可能性は、前述の「夫婦の連合」の確固たる存在を前提に

しているだろう。¹⁴⁾ この場合のそれぞれの性的役割のモデルとしては、男の子にとっては適応的ないしは道具的な役割をもつ父親、そして女の子にとっては統合的ないしは表出的な役割をもつ母親がそれにあたることになる。

この第三期は、子供が子供としての役割同一性と性的役割同一性のそれぞれを確立するための子供の独立にとっての基本的な時期である。その意味において、この時期の核家族内の役割分化のパターンをパーソンズにならって核家族の基本的役割構造 (basic role structure) と呼ぶことができるだろう。この時期の役割分化とは、世代の境界と性の境界を核家族内役割構造において明確に確立することである。核家族において、こうした役割構造が明確に確立したとき、子供はこの段階において家族離乳の前提となるところの完全な意味での家族依存を確立したことになる。

第四期 (思春期)

第二期の愛情依存は、子供の母親にたいするあくまでも無限定的な愛情依存であった。第三期に入って、その無限定的な愛情への依存は、愛情離乳の達成をみなければならなかった。それは限定的 (specific) で選択性を許すような愛情への発展である。子供がこのような意味においての愛情選択 (love-choice) を確立するのは、性器危機の段階を経過してから、そののちのことである。愛情離乳してから次の愛情選択を確立するまでに潜在期 (latency period) を必要とするのは無限定的な愛情依存から離乳し、限定的であり、かつ選択的な愛情選択を確立するのに強い情緒的葛藤の解決のための長い期間を要するというを示唆しているだろう。

同じように、第三期における権威依存は、子供の定位家族におけるあくまでも個別的な権威への依存であった。子供は、性器危機の段階に入って、教

14) 精神分裂病家族に関して、リッツの指摘する夫婦分裂性 (marital schism) は、この夫婦連合に異常な葛藤の存する場合を意味するだろう。T. Lidz, A. R. Cornelison, S. Fleck & D. Terry, "The Intrafamilial Environment of Schizophrenic Patients: II. Marital Schism and Marial Skew," in *American Journal of Psychiatry*, CXIV, 1957, pp. 241-248.

育機関などのような家族外の社会体系に参加することによってその個別的な権威から離乳し、普遍的な権威 (universalistic authority) を学習することになる。そして、この第四期の終るところには、父母の個別的な権威から解放され、権威への単純な一方的依存ではなく、自己の判断にもとづく権威選択 (authority-choice) を確立することになるのである。この時期の子供は、親の個別的権威への依存を拒否するようになることから「反抗期」と呼ばれたりすることになる。しかしながら、家族社会学的な観点からすれば、こうした反抗はこの時期の子供の一般的特性というよりは、むしろこの時期における家族の構造的な特性であるということができよう。すなわち、家族の役割構造のあり方いかんによって、子供は難なく権威離乳し、そして権威選択の確立を可能にしたり、または権威離乳に支障をきたして反抗したりするのである。したがって、この時期の子供にたいする理念型としての父母間の役割分化は、子供に難なく権威離乳させ、そして権威選択の確立の可能性をあたえるものでなくてはならないだろう。その意味からして、この段階での父母間の役割分化は、コーザーが指摘する態度的-行動的 (attitudinal-behavioral) という区分が可能であるといえるだろう¹⁵⁾。

コーザーは、子供の精神的発達にとって、家族内において子供とその重要な役割相手としての両親との役割連結化 (role articulation) の重要性を指摘している。そして加えて、かの女は次のように強調している。すなわち、その役割連結化は、あくまでも子供にたいする順応への期待における両親間の質的分化の存在を前提にしてのみ可能である、と。コーザーにしたがえば、もしそこに両親間の質的分化が存在しなければ、子供はどちらか一方の親から態度上および行動上のアンビバレントな期待を同時に受けることになり、

15) R. L. Coser, "Authority and Structural Ambivalence in the Middle-Class Family," in R. L. Coser (ed), *The Family: Its Structure and Functions*, St. Martin's Press, 1964, pp. 370—383.

そこには親子間における役割連結化のメカニズムが作用しないことになるということである。この場合の両親間の質的分化は、権威のタイプ、関心のタイプ、および観察可能性の度合などにおける差異によって、子供にたいする態度上での順応の期待を主として父親が、そして行動上での順応の期待を主として母親がするということである。もちろん、この分化は第四期に限られたものではないが、子供が権威離乳し、そして権威選択を確立するという観点からすれば、第四期にとりわけ重要であるということになるだろう。なぜなら、態度上の順応における期待は、普遍的権威への移行を助長するものだからである。このような両親間の質的分化によって、子供は肯定的なり、あるいは否定的なりに権威選択の確立の可能性を親、とりわけ父親から助長されることになるのである。

第五期（青年期）

第四期の終りの家族離乳危機は、子供が家族内の役割構造から情緒的に分離するための最終的危機である。この段階では、すでに子供が愛情選択と権威選択の可能性を十分に確立するにいたっていれば、家族離乳の危機を難なくのり越えていくことだろう。すなわち、かれは精神的に独立した成人として自己の内的に確立した権威に依拠して、すべて行動を律するようになるのである。心理学的な観点からすれば、これはエリクソンのいう自我同一性(ego-identity)の確立を意味しているだろう。¹⁶⁾そしてこの第五期は、いわゆる核家族の構造的自立化をめざして配偶者選択の行動が具体的にはじめられていく時期である。核家族内において基本的役割構造の確立をみななかったところに育った子供は、この時期に家族離乳を達成することができず、また自我同一性の確立ができずに苦悩することになるだろう。こうした子供は行動の方向づけが得られずに無為にすごしたり、家族離乳のためにもがき、苦しむことになるだろう。ときに家族離乳のための行動化(acting-out)が生

16) E. H. Erickson, *Childhood and Society*, W. W. Norton & Company, 1950.

るという、夫婦間ではなく「父母間」の質的役割分化（夫婦境界）が強調されるのは、主位境界となり、生活の単位となってきた核家族が機能集団としてそのシステムの存続維持を達成しようとする限りにおいてである。機能集団として核家族がそのシステムの存続維持を確保しようとするということは、核家族が社会的下位体系としての基本的機能を正規に遂行しようとすることを意味する。すでに述べたように、現代家族の基本的機能の一つは子供の基礎的社会化である。だとすれば、核家族内の父母間の性的役割分化の必要性の大きな部分は、この子供の社会化のためであるということになる。²²⁾では、なにゆえに子供の社会化のためにこのような図式的な性的役割分化が核家族内において生じるのだろうか。それは具体的にはおおむね次のような理由によるだろう。すなわち第一に、子供を出産するという社会にとって最も重要な役割の一つが成人の女性によってのみ遂行されるという事実からして、核家族内での子供のナーチュランスのための心理学的な役割を母親が遂行する可能性が最も大きいということ、そして社会は核家族内においてその役割を遂行する位置にある者をすでに「母」という名称で呼んできているということである。第二に、子供の社会化において子供が心理学的に規定された性的役割同一性を確立するのは、核家族内の父母のそれぞれの性的役割への同一化を前提にしているということである。もし子供が社会化の過程において心理学的に規定された性的役割同一性を確立できなかったとすれば、極端な場合には、その人は男性または女性としての性的役割の遂行において心理学的あるいは、ときに文化社会的に適応できず、肉体的に成人になっても異性に性愛を感じるができないとか、あるいは結婚することができないとか、または結婚できてもその結婚生活が維持できずに離婚してしまうとかな

22) このことは裏返していえば、いま子供のない家族があって、子供の社会化のための機能を遂行する必要のない場合には、こうした図式的な性的役割分化を必ずしも必要としないということになるだろう。

ど、結婚相談所や家族裁判所、あるいはときに病院の精神科における問題ケースとなったりすることだろう。そして第三に、もし子供の社会化過程において父母間の期待に質的分化がなければ、コーザーが指摘しているように、子供は一方の親から矛盾した期待を同時に向けられ、アンビバレントな関係を形成してしまうことになり、²³⁾ 両親と役割連結化することができず、自己の同一性の確立に失敗することになってしまうだろうということである。

この図式において父母が権威的で、息子と娘がそれに依存的であるという世代間の質的役割分化が強調されるのは、自立的核家族がまだ社会化されていない子供にたいして、まず子供という社会的役割を取得させ、かつ認識させ、その役割同一性を確立させることによって子供を社会化させていくということに関する限りにおいてである。親が子供にたいして権威をもっていること、すなわち核家族内で父親が子供にたいして主として道具的役割において権威的であり、母親が主として表出的役割において権威的であり、それぞれが相互にたいして権威を有しているとき、子供は親の権威に依存することによって子供としての役割同一性を確立することができるだろう。²⁴⁾ このような意味からして、この図式に示されている性の軸による役割の質的分化および世代の軸による役割の質的分化は、核家族の発達の・機能的要件であるといえるだろう。

社会化のための核家族の基本的役割構造におけるこうした縦横の二つの軸、すなわち性と世代の軸によって境界線を引くことのできる核家族内の役割関

23) この状況は、ベイトソンの二重拘束 (double bind) の理論において提示された状況である。G. Bateson, D. D. Jackson, J. Haley & J. Weakland, "A Note on the Double Bind", in *Family Process*, 2, 1962, pp. 34-51, and pp. 154-161.

24) 本稿において論じられている「親の権威」とは、いわゆる親としての権威ではなく、むしろ「成人としての権威」と規定した方が正確である。なぜなら、それは成人した子供にたいしては何らの効力も有さないからである。したがって、ここに改めて付記すれば、子供の社会化には両親に親としての永久的な権威は不要であって、成人としての権威こそが不可欠であるということになる。

図5 社会化の重要テーマと相対的重要件

| 時 期 | 社会化の重要テーマ | 機能上の相対的重要件 | 構造上の相対的重要件 |
|-----|-----------|------------|------------|
| 第2期 | 愛情依存 | 愛 情 | 父母の役割分化 |
| 第3期 | 愛情離乳 | 権 威 | 夫婦の連合 |
| | 権威依存 | | 父母の役割分化 |
| 第4期 | 権威離乳 | 愛 情 | 夫婦の連合 |

の相対的重要件および、この機能上の相対的重要件を産出する適合的な核家族内の構造上の相対的重要件の関係を図示してみると、それはおおむね図5のようになるだろう。

第二期において子供が社会化の重要テーマである愛情依存を確立するためには、社会化させる側が子供にたいして愛情をもっていることを不可欠としている。すなわち無限定的な愛情依存のメカニズムが作用するためには、まず愛情という要件の存在を前提にしているのである。このことはもちろん愛情という要件以外のものの必要性を否定するものではない。ただ、愛情が相対的に最も重要な要件であるということの意味している。これと同じことは第三期および第四期の社会化の重要テーマの確立ならびに達成にたいするそれぞれの機能上の要件についてもいえるだろう。第三期の社会化の重要テーマは、愛情離乳であると同時に権威依存である。このことは愛情離乳が達成されたのちに権威依存の確立があるということではなく、両者が同時に達成ならびに確立されるということであって、愛情離乳は、すなわちそのまま権威依存を意味しているのである。この両者の達成ならびに確立のための機能上の相対的重要件は権威である。そして第四期の社会化の重要テーマである権威離乳の達成のための機能上の相対的重要件は愛情である。これらの愛情とか権威とかといった機能上の相対的重要件を産出するためには、いうまでもなく社会化させる側においてそれらの要件の産出に適合的な核家族内における構造上の一定の要件が期待されるだろう。

第二期における愛情依存の確立のための機能的要件としての愛情の産出は、核家族内の構造的要件として「父母の役割分化」を最も基本的な相対的重要件としている。すなわち無限定的な愛情依存の確立は、母子の強力でエロチックな情緒的結合を必要とする。この母子の強力でエロチックな情緒的結合は、夫婦の強力でエロチックな情緒的結合と本質的に矛盾の関係にある。夫は妻が母親という役割を十分に遂行できるように核家族内での役割洞察力を高めなければならないし、夫婦は父母という役割において質的分化を確立しなければならない。このことはもちろん父母の役割分化という要件以外のものの必要性を否定するものではない。ただ、この要件が相対的に最も重要な要件であるということの意味している。これと同じことは第三期および第四期の社会化の重要テーマの達成ならびに確立にたいするそれぞれの構造上の要件についてもいえるだろう。次に、第三期の無限定的な愛情依存からの離乳の達成のための機能的要件としての権威の産出は、核家族内の構造的要件として「夫婦の連合」を最も基本的な相対的重要件としている。すなわち愛情離乳の達成には、子供に「子供としての役割同一性」の確立を可能にさせる親としての権威が夫婦に期待されるのである。親としての権威を夫婦が確保するためには夫婦が連合していなければならない。夫婦の情緒的結合を前提にした夫婦の連合、すなわち第三者を寄せつけない排他的な夫婦間の愛情は、母子の情緒的結合を発展的に解消させ、子供に限定的な愛情選択の確立を可能にする方向づけをあたえはじめることになる。そして子供にとって、この愛情離乳の達成は、同時に親の個別的な権威依存の確立の過程でもある。この権威依存の確立のための機能的要件としての権威の産出は、核家族内の構造的要件として「父母の役割分化」を最も基本的な相対的重要件としている。すなわち愛情離乳の達成は、核家族内での子供にたいする親の権威の位置づけを意味している。そして、それは主として母親とは異なった意味での父親の役割の位置づけを意味し、また父母のおのおのの権威の核家族内での

身別居生活をしている。大阪近郊の S 市の自宅には K とその母親、母方祖母、および三女の留美の四人が同居。長女の恵美と次女の奈美は一卵性双生児。二人は共に現在同じ私立高校の寮に入寮中。父親は現在、月に約12万円ほどの生活費を送金してくる。母親は一人娘で、生後まもなく父 (K にとって祖父) 死亡。祖父母と母親に育てられた。高等女学校卒。

〈診断名〉

A 病院では精神分裂病と診断されている。妄想や幻聴のあること、および破瓜期発病の点から、また分裂病的様相を呈している点からして、精神分裂病と診断されるだろう。B 病院でもケース会議の結果、精神分裂病と診断された。しかし主治医は「自殺」ということを重くみて、また入院後のそう状態も考えて、D—M phase (そううつ) のあることを主張し、不定型精神病の疑いがあるとしている。この点に関しては、今後の経過を追う必要がある。精神分裂病とみる向きは悲観的であり、不定型精神病とみる向きは、いくらか楽観視があるといってよい。もちろん主治医も、この不定型はあくまでも精神分裂病圏のものであるという。

〈経過〉

6/2 B 病院精神科閉鎖病棟入院 (コルセット着用のまま)

- ①閉鎖病棟であることを知って、しきりに退院させてくれと看護婦にせがむ。
- ②調査者に対しては安定した態度を示す。しかし病院はイヤだ、帰りたい、という。
SCT (心理テスト) を書くようにすすめる。
- ③クロールプロマジン系統の特殊薬物が相当量投与されている。

6/3 朝から病棟の詰所の窓口に来て、病院を訴えてやるとか、やり方がひどいとか、大声でどなっている。1 時間位、同じようなことをいって部屋に戻っていった (病棟看護婦長談)。調査者に退院させてくれといって土下座している。服薬は拒否しない。

6/7 母と祖母来院・面会。

6/9 母親来院・面会。

(外科病院ではどうだったの?) (調査者)

(本人談) ラジオ〇〇をトランジスター・ラジオで聞いていたとき、この曲は自分

が作ったんだと、つぶやいたら、しばらくして「キチガイ」とか「白痴」とか誰かがいった。また「モンゴリズム」ともいった。これは隣の病室の人がいったのだ。隣の人は用心棒だったのかもしれない。本当は友人になりたかったのだ。隣の人も自分と同年輩だった。あの時は自分も落ちついていて、自分の作曲であることも本当だ。白痴だといったのは顔を見て、そういったと思う。病院の廊下で顔を見られたことがあるから。先のA病院で電気ショック療法を30回位かけられたので、きっとそう見えると思う。きっと隣の青年が友だちになりたがっていたのだ。

(隣の人が用心棒だということは?)

朝鮮人の組合の関係者と母との間に女の子(ミカちゃん)ができた。確か小学2年の時だった。名前がなかったので「ミカ」とつけてあげた。妹の「恵美ちゃん」や「奈美ちゃん」や「留美ちゃん」とは違う。もう5~6回あったことがある。今は大阪のナイトクラブ美加にいる。その用心棒だったのかと思う。用心棒が無理やり、この病院(B病院)に長く入院させようとしているのだ。

(お父さんのことについて話してくれない?)

父のことはあまり分らない。頭がいいし、立派な人だし、尊敬している。母も尊敬しているが、もう少ししっかりしてほしい。

以上のことを熱心に調査者に語る。面会時(面会室にて)母親に対して「もっとちゃんとしなさいよ。下を向いて歩かずに、頭をあげて……。この人はダメなんです。」という。

6/16 母親来院・面会。

生育歴について(母親談)

- ①児童・少年期から思春期・青年期まで積極性に欠けていた。乳・幼児期には問題はなかった。小さい頃から「良い子」で困らせるようなことは無かった。小学4年までO市にいた。小学4年の途中で大阪の小学校に転校した。成績は常に上位を占めていた。生まれたのはY市である(O市ではない)。小学校以来、父親との対話はまったく無かった。乳・幼児期には父親(夫)もオンブしてくれたりしたこともあった。
- ②反抗期がなかった。父親に対してコンプレックスがあったのでは、と思う。父親を

の毅然とした態度に相手は手を引いた。」しかし別居後は、また別の女性がいるのではないかと思う。夫婦の性関係は全くない。

- ⑥ Kがベランダから落ちたとき、その連絡を電話でしたら、夫はその時はじめて離婚を口にした。しかし時が時であったので、それはそのままに……。しかし無理にはいってきていない。

母親は、夫に対してネガティブな反応（感情）を極力おさえて以上のことを語った。最後に、冷静に「愛情は全く感じておりません」という。

〈所見(1)〉

ここでいままでの面接などの情報から次のことが予想される。まず妻は夫にたいする感情の転移をKにしている。たとえば、青年期になって身体が父（夫）に似てきたとき、実に憎らしくなったという。長女および次女の双子の妹ができたとき、あたかも母子家庭のように母親はKを心理的に分離させ、意図的に心理的乳離れを行なった。その意味で母親への愛着（または固着）は見られない。しかしそれは完全な意味での愛情離乳の達成とはいえなかった。つまり、母と子の関係は共棲的でないわけではないのである。たとえば、母親にとってKは頼みの綱であるし、K自身、母親の不安を読みとって母親を安心させたい、などと思っている。6月9日の面会時のKの母親にたいすることばかりも母子の何らかの共棲的關係を推測することができるだろう。

一方、Kは母親の立場（夫との関係）をあわれに思う反面、母親と父親の関係を「どうすることもできない状況」から母親にたいして葛藤を表面化させ、憎しみさえもっている。²⁵⁾ときにかれは暴力的にもなっている。ところで母親は、Kにたいして「哀れみと憎しみ」（アンビバレント）をいできてきたという。このことはエディプス危機以後の母親との正規の役割関係（権威関係）の確立を不可能にしただろう。また母親は子供の発病について、夫にたいする非難とともに、自分自身もKにたいして「感情ぬき」で反省し

25) ここでの「どうすることもできない状況」とは、およそ次のようである。すなわち、父親にたいして父子の役割関係を確立することができない状況であり、心理的乳離れを母子家庭のように何とか作りえたKが、つづいて正規の権威関係的な親子関係を母子間に形成するのに、つまり家族内で「子供の役割」を取得するのに、困難な位置におかれているという状況である。

「ているという。母親は「これから、どうしたらよいか分らない。いままではすべて毅然とした態度でやってきました」と、涙ぐむ。だが涙ぐんでも、すぐに冷静さを保って語っている。

なお母親は、Kにたいして父親への橋渡しの役割をとるとき、母親としては父親にたいして尊敬を、そして妻としては夫にたいして憎しみをと、まったくアンビパレントだった。当然、この状態では正規の橋渡しにはなれなかったにちがいない。つまり、このことはまさに「夫婦の連合」の欠如を意味しているだろう。

〈経過〉

6/19 治療計画についてKに説明する。いくぶん安定してきている。しかし「ミカちゃん」のこと、作曲のことなどについては強い確信をもっている。「今からすぐにラジオ〇〇に電話して確かめてくれ。本当なのだから」という。

6/23 ケース会議（Kを囲んで）

治療スタッフ十人ほど（精神科医、臨床心理士、ソーシャルワーカー）に囲まれての質問に対して、次のようにいくぶんそう状態になって解釈妄想的にしゃべりまくった。例えば「自動車のカペラの名前は自分が考えた。ラジオ〇〇のテーマソングは自分の作曲だ。自分は蒙古の末裔だ。各国一人選出のコーラス隊アップ・ウイズ・ピープルに自分は小さいころ選ばれた。太陽をみると『スペクトル』に見える。そのことを考えていて、心配でベランダから飛びおりた。死ぬつもりではなかった。運動のつもりだった」など。

6/30（調子は？）

（本人）大分、いいです。

（作曲のことは？）

はっきり分りません。でも作曲しました。小学校の時です。

（蒙古人のことは？）

何とも思っていません。大学の東洋史の授業に出てきます。

7/2 先に入院した外科病院にコルセットをとりはずすために、母親および調査者同伴で向う車中で、妄想、例えば作曲や異父妹について母親にはじめて語った。母親はおどお

どして「とてもショックです」という。病院で母親と別れて調査者と車でB病院に帰る途中、Kは「母が『ショック』といったのは事実だからです」という。Kは、ラポールももてるし、状態は安定している様子。しかし一定の妄想体系内での安定に思える。この体系への現実性の情報の注入と現実的認識が生まれたときの本人の状態に注目される。今後の経過に注意を要す。

7/7 (本人談) 「母に男がいたということと言ったのは、はっきりした証拠があるわけはありません。何となく、そう思えたのです。」

いくらか妄想の輪郭がぼやけてきている様子。

7/16 (家族の人たちは?)

(本人) 父とは話さない。母とも話さない。妹たちは皆、孤独みたいです。父に女がいると前に母がいました。父と母の仲は、中学から高校に進むにつれて少しずつ悪くなって離れていっているみたいです。母が可哀そうに思いました。十分に治るまで入院しています。開放病棟に移れますか。調子はいいです。でも午後3時頃、いつも少し不安になります。(妄想については触れたがらない。)

7/25 開放病棟に転棟

7/28 (最近、考えることは?)

(本人) 退院のことです。ミカちゃんのことには考えません。作曲も考えません。考え違いだと思います。妄想だったかもしれません。

8/4 (どう?)

(本人) 安定してます。悪くなるのではないかと心配、不安です。

母親来院。本日より8月7日まで3泊4日の外泊(帰宅)。

8/7 外泊中の状態について(母親談)

母親は、はじめて夫との間の離婚問題をKに語ったが、本人は軽く聞きながして、「そんなことはないはずだ。心配しすぎだ。たとえそんなことになっても心配するな」といったという。

父親について(母親談)

祖父母はH市でたくさんの山林をもつ地主だ。祖父母には学歴もなく、あまり教養も

ない。夫は厳しく育てられた様子だ。夫方の祖父母は無教育なのに「どうして、あんな立派な子（人）ができたのかと思います。」祖父母は手紙で、自分の息子は最高だとかいいながら、老いた二人の面倒を見てもらいたい（日本在住は彼だけなので）といっても、見てもらえないことで、嫁（私）に不満をいってくる。夫は父母をバカにしているみたいだ。「男性として夫は素晴らしい人だと思います。体格だけでなく、態度からも能力からも。だから私はあきらめられない……。今でも愛しています。離婚のことばが出るまでは必ず私のもとに帰ってくると思っていました。」

恋愛当時について（母親談）

私（妻）の父は、私が生まれると間もなく結核で死にました。祖父母は、家の蔵にある財産、例えば、ヨロイ、カブト、カタナなどを売って生活していました。母子家庭でしたが、大きくなるまで父の祖父母が居ました。私が女学校に通っているとき、どこでどう知ったのか、彼（夫）から誘われて、お付き合いするようになりました。彼は大学を出てから今の会社に勤めて、仕事のことによってY市に来ていたのです。その時、私は学校を出て一年ほど家に居ました。一人娘なので母は養子婿を考えていたと思います。しかし彼は強引に私を母から奪って、私たちは結婚しました。条件として一応将来は、私の母の面倒をみるということにしました。KはY市で生まれました。それからO市の方に転勤になり、一家三人で引っ越しました。小学1年のとき、長女（恵美）と次女（奈美）の双子児が生まれ、手がいるということもあり、また母（Kにとって祖母）はY市で一人になっていたのも、引きとって一緒に住むようになりました。夫はそれまでから仕事の都合などもあって夜遅く帰ったり、女遊びをしたりしていたようです。祖母と同居するようになってからは、それがひどくなりました。私は祖母がいるからと思って大目に見ていました。祖母はすごく遠慮していました。祖母と夫は殆ど口をききませんでした。夫も遠慮していました。祖母は「私は夫婦がうまくいくように夜などはいつも気をつかったのですがね」といっています。今にしてみたら、気をつかう祖母だったのがいけなかったとも思います。祖母さえ居なかったら、もう少し何とかなっていたかもしれません。夫は、きっと家に帰って私に甘えたかったのだらうと思います。私はバカでした。甘えさせてあげなかったんです。でも、夜の関係を私の方から拒否したのは一度だけでしたけど。私は

彼が外に甘えを求めるのを暗黙のうちに勧めていたのかもしれませんが。いや、そんなことは無かったと思います。夫が定った女性と関係ができたのは大阪に移ってからのこと（Kが小学4年の頃）です。彼が帰ってくると私の方が甘えたかったのです。でも、何だか遠慮があって甘えられませんでした。彼は私たちの生活にとって十分なお金を毎月ちゃんと入れてくれました。大阪の方の家も、最初は平屋を買ったのですが、今は二階建のベランダ付きの家です。最近では、夫は私たちの将来を考えてのことか知りませんが、家の裏の空地に学生の下宿（大学が近くにあるので）でも建てようかなどといてくれています。夫は確かに何もかも考えてくれる夫です。しかし子供のことと、私の心には……。

〈所見(2)〉

母子家庭に育った妻は、母親（Kにとって祖母）にたいして心の支えとしての精神的な夫の役割を果たしてきた。母親（祖母）の同居は、外で盛んに活躍する夫から、（妻とその母親との母子関係の再現によって）妻をうばったことになる。母親（祖母）と夫と妻の関係は、何となくしっくりいかず、互いに遠慮があり、夫は外に女性関係を固定させることになった。このことは夫婦関係をますます疎遠にさせた。互いに回避と疑惑が生まれる。夫婦同一性と夫婦のつながりは崩されていった（夫婦の連合の崩壊）。これに気づいた母親（祖母）はますます遠慮し、そして気をつかうようになる。妻は、そのような母親（祖母）を慰める役割をさらに強める。Kにとって父親の役割が重要になってきたころ、妻（Kにとって母親）は父親への橋渡しの役割が十分にとれず、家族内での夫と連合した意味での統合的な表出的役割を取ることができない（夫婦境界の欠如）。父親は、経済面での役割は果たしていても、子供にたいして妻と連合した意味での父親の役割はとれない。つまり疎外された役割しか演じていない。Kは母子家庭のように育つことになる。確かに双子の妹の出生とともに意図的な愛情離乳は行なわれたが、しかし続いて子供としての役割同一性の確立のための家族内世代間役割分化の位置づけを獲得できないまま（父親との役割関係を確立しえないまま）、家族のなかに放置された。Kは父と母の不和や家族内の不統合を心配し、心的エネルギーを自己の精神的発達よりも、父母の不和の心配や不安のために費やした。そのために種々な妄想体系を形成し、自らを失っていった。そして時には母にたいして「心の夫」の役割さえ果たした、あるいは果たそうとした。

Kにとってみれば、母親の役割と父親の役割に極端な相違があった。それは母親によるアンビバレントな夫（父親）にたいする態度によって助長された。ここに父親に関する情報の過度なインプットの可能性があった。それは母親がKに父親像を情報として流すときアンビバレントな感情から、また不安（Kへの悪い影響にたいする心配）から、父親を立派な人だと過度に説明することに由来する。またKが男性であることから、愛情離乳以後の性的同一化の対象は、必然的に父親でなければならないが、この強迫的圧力は、母親による過度なインプットとなると同時に、逆にKにとってKが父親と役割関係の確立（役割連結化）ができていないことから、Kをして窮地に追いこみ、Kをして妄想的世界に入り込ませる結果となった。したがって、Kから妄想体系を取り去れば（すなわち治療が進んで妄想が除去されれば）、Kは鈍麻な状態に落ち込むことになるだろうことが予想される。このように予想することは、Kの予後は悲観的であり、典型的な精神分裂病であるということを意味する。

〈経過〉

8/8（小さい頃はどんなだったの？）

（本人）父とは接触がなかった。父に叱られたことは全然ない。母には叱られたこともあったと思うが、小学校に入ってから全然ない。

8/10（H市によく帰るの？）

（本人）学校の休みに一年に一度くらい帰ってました。この前、帰ったのは家に居たら、人がうわさしたり、つけて来たりするので一人で出かけました。祖父母は親切です。その時、また誰かにつけられているようで、恐くなって部屋の中に飛び込んだんです。幻聴もありました。蒙古人だとか聞えてきました。今度の薬はジワジワと利くようです。前の薬の方は、すぐ利きました。今度の薬の方が良いのですか。何となく、まだ誰かがうわさしたりしている感じです。外の音が声になって聞えます。何といているかはっきりしません。悪口をいってます。母が父から離婚話しがでていると泣いていました。本当なのかなあ。

（でも泣いて話してくれたんだろう？）

はい、やっぱり本当なんだな。前には女がいると泣いてました。

(君はお母さんに何と聞いたの?)

心配することはない、そんなことはない、といいました。父と母はやっぱりうまくいってないのかな。僕が大きくなるにつれて父母の関係がうまくいなくなっているみたいです。父母が仲良く、うまく行ってほしい。きっと母が悪いのです。わかるでしょう。あんな母ですから。

(それはどういうこと?)

母は自分の考えを曲げないのです。母は表面的にしかいわないのです。父は立派だと思えます。尊敬しています。昨日、電話しました。はじめてしました。朝でした。偶然、アパートに居ました。過去のことは考えず、将来のことを考えよ、とってました。

(双子の恵美ちゃんと奈美ちゃんは?)

妹たちは父に似ています。二人とも男みたいです。

(話しはしないの?)

話しますけど……。

(留美ちゃんは?)

あまりなついてきません。話しはします。

(祖母さんについては?)

父と祖母は、全然合いません。口をききません。祖母さん、いい人です。気のきく人です。

(祖母さんとお母さんは?)

うまくいってます。相談合ってます。

(妄想のことは?)

はっきり分りません。でも本当だと思います。

(はっきり分らないんだろ?)

はっきり分りません。妄想です。

(ミカちゃんは?)

確かに前に会ったことがあります。

(お母さんに別の男がいるわけ?)

そんなことはありませんね。ミカちゃんができたのは中学時代だったと思います。

(心理テストに君はお母さんを殴ったことがあると書いているが……?)

覚えておりません。ただ、ホッペタに触ったくらいです。母がはっきりしないからです。母の心は僕には分っているのです。でも、母がよく分かりません、……。

以上、ひじょうに鈍麻な感じで語っている。おそらく、それは一部には服薬のせいもあるだろう。なお、本人は「お母ちゃん」ということばで母親を呼んでいる。

〈所見(3)〉

面会時の母子関係についての観察をいくらか記すと、母親はKにたいして、いつもオドオドしている。母親の方が恥ずかしそうにしており、娘のような様子に見える。一方、Kは落ちついて母親をじっと観察している。そして「そんな考えではダメだ」とか、「そんな態度ではいけない」などと注意したりしている。母親の話では、20才の成人式を終えたあと、Kは「お母ちゃんにはお父ちゃん以外の男性がいるのか、今の状態（別居のこと）なら居てもおかしくない」などといったりしたという。その時、母親はKにたいして「K君、あなたは成人になったのねえ」といった、と。母親は「私のことを色々と思いやってくれていた」と思いますと、いかにも母子が共棲的關係にあることを認めた。

〈経過〉

8/18 8月14日より18日まで外泊

(母親談) 外泊中は安定しており、不安も幻聴もなかった。もう退院させて欲しい。

離婚について (母親談)

先日、夫が帰宅したとき、正式に離婚手続きをしてほしいといわれ、その話しを冷静に話し合った。「私も印鑑を押すといった。」ひじょうに冷静で、和やかな話し合いだった。夫がH市の方に手紙を出した。それを聞いた夫の実父母は、すぐに心配でアメリカに行っている姉（その夫は日本人）に手紙をした。その結果、姉が大阪の方にやってきた。そして、絶対に離婚は許さないといわれた。相手の女は金で解決つけると、姉はいつていた。

〈所見(4)〉

妻は、離婚の件に関して義姉が反対したことを語ったのち、安心した顔つきで「これでまた縛りつけられたわ」という。相変らず、夫にたいしてはアンビバレントな態度で「男性は一人しか知らないが、あの人以上の素晴らしい男性はいない。だから、他の女が離れないのも分る。夫は絶対に弁解をいわない人だし、追ってくる女は振り切る人だ。女にとって最高に魅力のある男性だ」などという。そして、その反対に「あの方は男らしくないわ。女の気持ちの分らない人だ」などという。

〈経過〉

8/20 (なぜご主人は他の女性を求めたのでしょうか?)

(母親) 夫に以前、尋ねてみたことがあります。夫は、ずばり環境だといいました。私が嫌いだからではないといいました。またH市の父母の面倒を見ていないという理由もありそうです。私の母については良い人だ、気をつかう人だ、といっていました。(他の女には子供は?)

それも尋ねてみました。夫は子供が嫌いだからつくらないのです。夫は家のこと、子供の学校のこと、しつけや教育のこと、一切は女の仕事と考えています。夫の仕事は女に経済的な心配をかけないことだと考えているようです。

〈所見(5)〉

妻は、夫にたいしてネガティブな感情をもっている。だから、このことが子供のしつけに悪影響すると考えて、無意識的に自己の防衛機制として尊敬すべき父であるという情報のインプットをKにたいして過度に行なってきた。このことは現実の父親との十分な接触がなく、現実吟味 (reality testing) のできないKには妄想的な現実認識になってしまうだろう。妄想的になることによって、Kは母親からの反動形成 (reaction formation) 的な過度な情報のインプットにたいして自己の防衛機制を働かしてきたのである。この場合、過度とは、量的に過度というよりも、圧力的とみる方が正しい。

〈経過〉

8/25 母親より電話にて、H市の祖父の死亡の件、連絡を受ける。母親はそのために1週間ばかりH市の方に出かけるので、よろしく、と。

8/27 本人から、退院させてくれ、と要求してくる。SCT（心理テスト）の結果について説明をする。

（君はSCTに、今までに一番悔いていることとして、お母さんを一度殴ったことと書いているけど、それはいつごろ？）

（本人）よく覚えていません。

（中学校のときくらいかな？）

いや、確か……………高校のときです。

（高校何年のとき？）

高校……………2年のときだったかな。

（それは夏？ 冬？）

暑かったと思います。

（夜、昼、どちら？）

昼

（君とお母さんと二人きりだったの？）

ううん、恵美ちゃんか奈美ちゃんのどちらかが一緒に居たと思います。でも見てたかどうか分らない。ちょっと触ったくらいです。でも、やっぱり殴った。

（どこを殴ったの？）

ホッペタです。

（ゲンコで？）

平手……………いやゲンコです。

（どうして殴ったの？）

分らへん……………。

（わからずに殴ったの？）

そんなこと無いけど。思い出されへん。

（どうして殴ったのかな？）

覚えてないわ……………。

(頭を後につけて目をつむって、ゆっくり考えてみてごらん?)

……………。

(何もなかったら殴るはずがないだろ? お母さんが何かしてきたの?)

お母ちゃんが胸をつかまえて、何かをさせようとしたんだ。だから、ちょっと殴った。
お母ちゃんの顔つきが恐かった。でも、すぐ謝った。

(何で謝ったの?)

そりゃ、殴ったもん。

(何とって謝ったの?)

うーんと、ごめんな、ごめんな、と5回くらいいった。

(お母さんは君に何をさせようとしたんだろ?)

……………。分らへん。

(お母さんは君に何かして欲しかったんだらうか? それとも何か気にいらなかった
のだらうか?)

そうや、して欲しかったんや。

(それは何だろ?)

分らへん。確か無理やりにさせようとした。

(その当時、君の生活はどんな風だったの?)

……………。覚えてない……………。夜、遅くまで考えていたり、風呂に入らなかったり、い
ろいろ一人で考えていた。……………。

(そのこととお母さんが君に何かさせようとしたこととは関係があるのかな?)

そうや、お母ちゃんは怒っていたんや。恐かった。今までに見たことのない感じだっ
た。……………。

(それで殴ったの?)

うん。……………。

(もっと別に殴らなければならない理由があったんではないの? 君の心として……
…………。)

そうや、ずっと前から、あのころはお母ちゃんのことを考えていたんや。お母ちゃん

とお父ちゃんの二人のこと。お母ちゃんに何とかしてあげたかった。お母ちゃんが可哀そうだった。お母ちゃんのことばかり考えていた。部屋と部屋の敷居のうえで、お母ちゃんに無理やりにいわれて急に殴った。仲がいいと殴ることがあるのと同じです。お母ちゃんのことを考えていたのに……………。

(お母さんのことをどんな風に考えていたの?)

……………。お母ちゃんの気持ち……………。

(君はお母さんに何かを感じていたの?)

覚えていません。お母ちゃんの気持ちと僕の気持ちは一緒だと思っていた。今でも同じ性格だと思います。顔も似ているし……………。

〈所見(6)〉

Kは、母親にたいして夫(父親)との関係がうまくいってなく、性的欲求不満のあるのを感じとっていた。Kはそのことを何とか解決しようと、ずっと考えこんでいた。その時点で、Kはすでに家族内で世代の軸を越えていた。具体的な行為は何もなくとも、Kは母親にとっての性的相手として他の成人の男性を妄想的に考えるか、または自ら母親の性的要求の充足の相手役をかって出るくらいに悩み、考え込んでいた。近親相姦的な感情は多分にKの方に高まっていただろう。夜おそくまで考え込んだり、眠れなかったりした。必然的に日常生活はふしだらになった。たとえば、朝、遅くまで寝ているとか、朝、顔を洗わないなど。それにたいする母親の心配と執拗な強制にたいして、Kは母親にたいしてアンビバレントな感情をもった。アンビバレントな感情を防衛するために、Kは母親にたいして攻撃的に出たと考えられる。そして、これが極めて強力であったために、現在強い抑圧がみられるものと考えられる。

〈経過〉

8/28 母親来院

夫と父母(H市)の関係について(母親談)

H市の父(祖父)が心臓マヒで死亡したのでH市に行っていた、と。その祖父のベッドの下に夫から祖父あての手紙があった、と。ショックな手紙だといって見せる。一

通は5月20日の手紙で、8年間も妻との間には性関係がないこと、幸せな半生ではなかったこと、など書かれている。この外に1年前から付き合っている昭和7年生れの女性のいること、妻と離婚して、この女性と一緒にになりたいこと、金（5千万円）を祖父から借りて事業をしたいこと、などが書かれている。二通目は6月2日のもので、おそらく祖父からの前の手紙の返事に対するものの様子。「親をバカにしていると立腹なさっておられるが、……………」 「こうなったら自分でやっていきます……………」 などと書かれている。

H市に行った時、夫と二人で母親にあいさつをしたが、その時、母親が夫に「〇〇さん、あんたがお父さんを殺したようなものよ」といったという。「H市の父母は、今までは嫁が悪いと思っていたが、今になって息子の行動の悪いことを知った様子です」という。夫の母（現在、入院中）が「印鑑など押したら駄目よ。一生ついててやって欲しい」といったといいながら涙ぐむ。「手紙など出さねば分らなかったのに、主人も人がいいので本当にミスをなされたと思います」という。夫にまた私が嫌いかと尋ねてみた、と。夫はあくまでも「君は最高だ」、「君はできすぎている」としかいってくれなかった、という。

8/31 外泊より帰院

（母親談）本日、朝方、やはりミカちゃんのこと、作曲のこと、他に〇市にいたころ他の女の子と性関係をしてしまったことなど、妄想的なことを語った、と。その他、疲れているだろう、と、いって体ぢゅうをさすってくれたり、やせているから、もっとちゃんと食事をした方が良いだの母親みたいにいった、と。高校時代から「やせているので、どうしたら良いか」などといってくれていた、と。

《主治医、一週間後の退院を許可す》

9/7 母親より電話を受ける。

H市の母（祖母）が死亡した（入院中だった）ので、H市に来ている。明日、帰阪するが、その前にKの父親に病院に行ってもらうので会って話してほしい、と。

9/8 父親来院

父親はアタッシュ・ケースをもち、茶色のスーツを着て、身だしなみの良い、また体のガッシリとした恰幅のよい中年男性で、ことば使いも極めて丁寧である。

生育歴について（父親談）

幼稚園から小学校一年までO市ですごし、二年生からN市に移り、またS市の方にと三回も小学校をかえた。最初の学校では活発にしていたが、徐々におとなしく無口な子になっていった。転校などが良くなかったのではないかと思う、などという。

時間的に余裕がないので、急いでいる様子。父親は、本人と面会した時、本人から「祖父母が死んで悲しいか」と、恰もやさしく慰めるかのように尋ねられてびっくりした、という。夫婦関係などについては、初対面のため聞きだすことはできない状態である。

《退院》（父親が引き受けて連れて帰る。）

9/18 本人，母親同伴で通院

学校には行っていないが、元気にやっている。服薬も続けている、と。

〔付記〕

この調査研究の一部は、文部省の昭和49年度科学研究費補助金の援助をうけて実施された。ここに付記して謝意にかえたい。